

「福は内鬼は外」と言うけれど」 ヨハネ 8：1～11

I 導入部

おはようございます。2月の第一日曜日を迎えました。厳しい寒さの1月でしたが、1年で最も寒い季節、2月を迎えました。寒い中、礼拝によるおこしをおいでも下さいました。愛する皆さんと共に礼拝できますことを心から感謝致します。

2月3日は節分です。節分と言えば、今日の説教題にもなっていますが、「福は内、鬼は外」と言って豆をまくのが習慣となっているようですが、節分の意味は、季節を分けるという節分の漢字からもわかるように、季節の変わり目という意味です。立春、立夏、立秋、立冬となる前日のことを節日（せちにち）といい、中でも年の初めに訪れることから立春の前日のことを節日（せちにち）から節分と呼ぶようになったようです。

節分の日、今でいうと大晦日、その夜を年越しとして終（ひいらぎ）の枝にイワシの頭をつけて、入り口に飾り（邪気を払うため）、夜には豆まきをして厄払いを行ったようです。また、節分に恵方巻を食べることがあります。スーパーには何日も前に恵方巻がズラリと揃ってありました。私もおいしそうなので、買って食べました。恵方とは、吉方（きっぽう）の事を指し、陰陽道でその年の幸福をつかさどる神である歳徳神（としとくじん）がいる方角だそうです。節分の日恵方に向けて、無言で食べると縁起がいいとされているようです。

私は子供の頃、2月3日の節分の日には、鬼の仮面をかぶった人に、「福は内、鬼は外」と豆を投げつけ、自分の年齢分の豆を食べたものでした。おそらく、今ではあまりそのようなことはしないのでしょう。

さて今日は、ヨハネによる福音書8章1節から11節を通して、「福は内、鬼は外」と言うけれど」という題でお話いたします。

II 本論部

一、人間とは罪深い者

今日の箇所は、姦淫の現場で捕らえられた女性をどう扱うのか、ということを律法学者たちやファリサイ派の人々がイエス様の意見を聞くわけですが、しかしこれには裏があり、イエス様がどのように答えても、イエス様を訴えることになるという律法学者たちやファリサイ派の人々の思惑、魂胆があったのです。そして、この魂胆のために、この女性は利用されたようなのです。権力のある者や地位のある者たちが、権力や金の力で、正しい事さえも曲げてしまう。悪い事さえも良きことに変えてしまうという世の中の裏というか、そのような理不尽な行動があります。それは、テレビドラマや映画でも、そのような事柄

が多くあり、正義の味方が悪をただす。悪を成敗するというのがあるわけです。けれども、弱い者が、力のない者が悪に苦しみ、悲しみを経験するということは多くあるのです。

この女性は、利用されたにせよ姦淫と言う罪を犯したのです。ユダヤの律法では、姦淫は三大の罪と言われて、罪の中でも極刑にされるほどです。彼女は罪を犯し、人々の前に、姦淫を犯したことを暴露され、見世物にされたのです。リビングバイブルでは、「ユダヤ人の指導者やパリサイ人が、寄ってたかって、一人の女を引っ立てて来ます。」(8:3)とあり、「モーセの法律では、こういう不届き者は石で打ち殺すことになってますが、どうしたものでしょう。」(8:5)とあります。イエス様を訴える口実が見つかるために、この女性はどくなってもよい。イエス様を訴えるためのエサのように考え、正しい自分たちは、罪を犯した女性を上から目線を見て、「こんな不届きな者は裁かれるべきだ」と心で思いながら、自分たちの勝利を確信しながらも、イエス様の答えを待ったのです。

ローマの信徒への手紙3章には、「正しい者はいない。一人もいない。」(ロマ3:10)

「彼らのどは開いた墓のようであり、／彼らは舌で人を欺き、／その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道知らない。彼らの目には神への畏れがない。」(ロマ3:13~18) 人間の罪深さ、愛のなさを示しているように思います。自分の事は棚に上げて、人を責めるのは、私たち全ての人に共通することだと思ふのです。律法学者やファリサイ派の人々の姿は、実は私たち一人一人の姿なのだと思うのです。

二、神様の言葉が与えられる

律法学者たちやファリサイ派の人々は、イエス様に問いました。6節を見ますと、「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。」とあります。何を書いておられたのかは、聖書は記しておりません。学者たちは、いろいろと考えています。質問にすぐに答えられなかったので、時間稼ぎをして、質問の答えを探していた。あるいは、姦淫を犯した女性の目を自分に向けようとした。あるいは、人間の罪を書いておられた。あるいは、律法を書いておられた。このようにいろいろな解釈があるようです。

私は、「指で地面に何か書き始められた。」という言葉から、モーセはシナイ山で神様から十戒、十の戒めをいただきました。神様は石の板に神様の指で記したのが十戒でした。出エジプト記31章18節には、「主はシナイ山でモーセと語り終えられたとき、二枚の掟の板、すなわち、神の指で記された石の板をモーセにお授けになった。」とあります。

神様は、ご自分の指で石の板に十戒を書いてモーセに授けたのです。神の指です。イエス様は神様ですから、イエス様はご自分の指で地面に何かを書かれた。ですから、やはり十戒、律法を書かれた、という学者の意見は当たっているのかも知れませんが、私はイエス様が、戒めは戒めでも新しい戒めを書いておられたのではないかと思ったのです。

イエス様は、最後の晩餐の時、裏切り者のユダが出て行った時、11人の弟子たちに、こう言われました。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ13:34) この戒めを書いていたのかも知れない。旧約では、神様の指が十戒、律法の戒めを書き、新約では、

イエス様の指が、「互いに愛し合いなさい。」という新しい戒めを書いたように感じるのです。寄ってたかって、姦淫を犯した女性を裁こうとする善人の律法学者たちやファリサイ派の人々は、赦しなんてことはことさら考えていないのです。榎本保郎先生は、新約聖書一日一章では、「許しはまじめな人のほうが、素直に喜べない面があるようである。悪い者は、罰せられて当たり前だ。そのような者が救われたのでは、私たちは一体どうなるのか、と自分の義を誇る者には、許しというのはあまり歓迎されない。」と言っておられます。わたしたちはどうでしょうか。

三、罪のないお方が私たちに赦される

7節を共に読みましょう。「しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」」 イエス様は、石を投げるな、とは言われませんでした。「投げなさい」と言われました。けれども、「姦淫を犯した者には石を投げるように、と律法には書いてある。だから、石を投げなさい。しかし、罪を犯したことの無い者が石を投げなさい。」と言われたのです。イエス様は、律法はいつでもよいとは考えていません。旧約の時代に神様が与えた戒めを大切にされたお方です。律法には石を投げろと書いてある。けれども、この罪を犯した女性に石を投げるができる者は、罪を犯したことがない人なのです。

イエス様のこの一言で形勢が変わりました。イエス様を追い込んだ質問、「先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうお考えになりますか。」という質問で、イエス様は不利になりました。絶対絶命です。しかし、人間がどんなに考え、準備し、計画したとしても相手はイエス様、神様なのです。勝てるはずがない。戦う相手を間違ったのです。イエス様の口からどのような答えが出て、自分たちには、勝ちしかない。そんな優越感と傲慢な思い、手段を選ばずにただイエス様を訴えるために工作した今回の計画も、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。」という一言で、そこに集まっている人々は、自分という存在、自分に問いかけたのです。「自分は今までに罪を犯したことがないのか」と。彼女を指さしていた指、人差し指は彼女を指し、親指は上、神様を指し、あとの三本は自分を指しているのです。9節には、「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとり、真ん中にいた女が残った。」とあります。リビングバイブルには、「すると、ユダヤ人の指導者もパリサイ人も、ばつが悪そうに、年長者から順に一人去り、二人去りして、とうとうイエスと女だけが、群衆の前に取り残されました。」とあります。詳訳聖書には、「良心を責められて」とあります。自分の心に手を当てて考えると、誰も姦淫と言う罪を犯した彼女に石を投げることはできなかつたのです。石を投げる権利はなかつたのです。自分たちは、神の前には正しい、義人だと自負していた律法学者たちやファリサイ派の人々さえも、石を投げることはできなかつたのです。

11節のカッコを共に読みましょう。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」この言葉には、赦されるはずのない者が、罪を罰

する力のあるお方から罪を赦されるという不思議な世界があることを示しているのです。

「**わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。**」
というのは、何でもかんでも赦される、というのではなく、その罪をイエス様が全て背負うと言うことです。私たちの罪が赦されるために、神であるお方、罪のないお方が、私たちの身代わりに十字架にかかり、父なる神様の裁きを受け、尊い血を流し、死んで下さった。命をささげて下さったのです。死んでよみがえり、赦しを完成され、私たちによみがえりの命、永遠の命を与えて下さったのです。

先週の金曜日には三浦綾子文学講座があり、森下先生がお話しをして下さいました。イエス様は、十字架の上で、両手両足を釘で打たれ、頭にはいばらの冠をかぶせられ、口には水ぶどう酒を受けられた。それは、私たちの頭で犯す罪、手で犯す罪、足で犯す罪、そして、口で犯す罪の身代わりになって死んで下さったのですと語られました。

Ⅲ 結論部

昨日は、節分でした。「**福は内、鬼は外**」と悪いものは外で良いものをいただきたいとする人間の願いです。今日は豆ではなく石を投げるという話でしたが、私たちは祝福をいただきたいですが、私たちのうちには罪で溢れているのです。頭で考えることは悪い事、とんでもない事、口で人を傷つけ、うそを言う。手や足で人を傷つける。そんな罪深い私たちを救うためにイエス様は来られたのです。私たちの罪を罰する権限を持つお方が、私たちの罪を赦して下さいます。ご自分の命を懸けて、命を指し出してまで。私たち一人ひとりを愛しておられるからです。

過去のサラリーマン川柳に、「**豆まきを したのに家に 鬼がいる**」というものがありました。この鬼が誰なのかは想像にお任せしますが、罪を赦された私たちもまた罪を犯してしまう者です。そのような者に対して「**わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。**」と言って赦しを宣言して下さいます。

姦淫を犯して捕らえられた女性は、自分からイエス様のもとに行っただけではありません。自分の意志ではなく、強制的に連れて行かれたのです。しかし、イエス様のそばに行っただけは、事実です。この事が大事です。失敗した、罪を犯した時、イエス様から離れていく人が多いのです。逆です。罪を犯した時、イエス様のそばに行くことです。イエス様がそばにいたから、彼女は赦されたのです。赦されて新しい歩みが始まったのです。「**これからは、もう罪を犯してはならない。**」とは、イエス様との新しい人生が始まるということです。

イエス様を礼拝した東方の占星術の学者たちは、「**別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。**」(マタイ 2:12) とあります。イエス様に出会う前と出会った後では違うのです。私たちは、もうイエス様に知られているし、イエス様を知っているのです。このお方が、この週も共におられ、私たちのそばにおられるのです。安心して、イエス様から離れることなく、イエス様の赦しを恵みを体験しましょう。